

第十一章 資本増加の法則

一

生産に必要なものは労働・資本・土地の三つであるが、前章で見たとおり、生産増加を妨げる要因はこのうち第一の要素である労働からは生じない。労働の側には、生産規模をどれほど拡大しても、その増加が無限に続き、しかも速度が緩むような障害は見当たらない。人口は一樣で速い等比級数の割合で増える力をもつため、もし生産の本質的な条件が労働だけであるなら、生産物も同じ割合で増え、自然にそうなるだろう。したがって、人類の数が実際に空間の不足によってこれ以上増えられなくなる段階に至るまで、生産の増加に上限はない。

しかし、生産にはほかにも要件があり、そのうち次に取り上げるのは資本である。どの国でも、また世界全体でも、現在の労働の生産物が出来上がるまでの間、人々は過去の労働の生産物によって養われるが、その生産物で支えられる人数を超えて人々を抱え

ることはできない。さらに、過去の生産物のうち、所有者が自らの享樂のために消費せず、再生産のために充てて蓄えた部分、つまり資本によって支えられる範囲を超えて、生産的労働者の数が増えることもない。したがって、資本が増えるための条件、増加の速さを左右する要因、そして増加に伴って避けられない制約を検討する必要がある。

資本はすべて貯蓄の産物であり、すなわち将来の利益を得るために現在の消費を控えることから生まれる。したがって資本の増加は、貯蓄に回せる資金の規模と、貯蓄を後押しする性向の強さという二つの要因に左右される。

貯蓄に回せる資金は、労働の生産物のうち、生産に関わった人々全員に生活必需品を行き渡らせたあとに残る余剰に限られる。ここでいう生産に関わった人々には、原材料の補充を担う人や、固定資本を修繕して維持する人も含まれるため、この余剰を超えて貯蓄することは、どのような状況でもできない。一方で、この余剰の範囲内であれば、実際に貯蓄されていなくても、貯蓄に回しうる余地は常にある。この余剰は、生産者が必需品以外の享樂を得るための財源であると同時に、生産に従事しない人々を扶養する財源でもあり、資本を増やす源泉でもあるので、これこそが国の真の純生産だといえる。しかし「純生産」は、資本家の利潤と地主の地代だけを指す狭い意味で使われがちで、

資本の純生産とは、費用を補填したのちに資本の所有者へ戻る分だけだ、という考えがその背景にある。とはいえ、この用法では狭すぎる。雇用主の資本は労働者の所得を形づくり、その所得が生活必需品を上回れば、労働者にも余剰が生まれ、それを享楽に使うことも貯蓄することもできるのだから、産業の純生産を論じる必要がある場面では、この労働者の余剰も純生産に含めるべきである。これを含めてこそ、国の純生産は国の実効的な力を測る尺度となり、公益や私的な享楽のためにどれだけ取り分けられるか、政府であれ個人であれ目的達成のために自由に処分できる生産物がどれだけあるか、当面の満足のために支出するか将来の利益のために貯えるかを選べる部分がどれほどあるかを示す。

純生産とは、生産物のうち、生産者が生きて働き続けるために必要な生活費や扶養費を差し引いたあとに残る超過分であり、その大きさは貯蓄額を左右する要因の一つになる。労働の成果が、労働者の生活維持と扶養に必要な分を上回って多く残るほど、貯蓄に回せる余地は広がり、またこのことは、実際にどれほど貯蓄されるかを決めるうえでも一部影響する。貯蓄の動機の一つは、貯蓄から所得を得られるという見通しや期待にあり、資本は生産に投じれば元本を再生産するだけでなく、増加分も生み出すという事

実がそれを支える。資本から得られる利潤が大きいほど、資本を蓄積しようとする意欲は強まる。ただし、貯蓄を促す誘因となるのは、土地、資本、労働が生み出す純生産の全体ではなく、そのうち資本家の報酬に当たる部分、つまり資本利潤である。さらに、労働と資本の生産性が高いほど資本家の取り分は大きくなりやすく、両者の関係は常に一定ではないものの、おおむね対応している。

一一

しかし、貯蓄しようとする気持ちには、外からの誘因、すなわち貯蓄から得られる利益の大きさだけに左右されるわけではない。金銭的な誘因が同じであっても、貯蓄に向かう度合いは人によって異なり、共同体によっても差がある。蓄積したいという実際の欲求の強さは、個人の性格の違いだけでなく、社会や文明全体の状況によっても異なる。ほかの道徳的属性と同様に、この点でも人類は、置かれた環境の多様さや進歩の段階の違いに応じて、大きな差異を示す。

本書は分量が限られているため、論点によっては十分に掘り下げようすると本書の

範囲を超えてしまい、ここでは扱いきれなくなることがあるが、そのような場合でも、必要な議論をより詳しく展開した他の著作を参照できるのは心強く、それで目的は果たされ、有益でもある。人口問題については、マルサス氏の著名な『人口論』が重要な手引きとしてこの役割を果たしてきたのと同様に、今取り上げる主題についても、広く知られているとは言いにくいものの、レイ博士の『政治経済学の新原理』を確かなよりどころとして同様の自信をもって参照できる。資本蓄積を決定づける原因について、原理と歴史の両面からこれほど多くの光を当てて示唆し、明らかにした書物は、私の知る限り、ほかに見当たらない。

あらゆる蓄積は、将来の利益のために、現在の利益の一部を犠牲にすることを伴う。だが、そのような犠牲が得策かどうかは、状況や環境によって大きく左右され、また、それを進んで行う意欲は、さらに大きく異なる。

将来を現在と比べて判断するとき、将来に伴う不確実性は主要な要素であり、その度合いは状況によって大きく異なる。したがって、将来への備えを自分や他者が実際に享受できる見込みを高めるあらゆる事情は、蓄積を求める実効的な欲求を強める、という見方には道理がある。たとえば、健康的な気候や安全な職業は生存の見込みを高め、こ

の欲求を強める傾向がある。安全な職業に就き健康な国に住む人は、不健康な職業や危険な職業に就く人、あるいは人命に有害な気候の下にいる人よりも、はるかに儉約に向かいやすい。船員や兵士は浪費に傾きやすい。また、西インド諸島やニューオーリンズ、東インドでは住民の支出が多いが、同じ人々でもヨーロッパの健康な地域に移り住み、ぜいたくな流行の渦に巻き込まなければ、儉約に暮らすようになる。さらに、戦争や疫病は、その後に続くほかの害悪とともに、常に浪費とぜいたくをもたらしてきた。これと同じ理由から、共同体の事柄に安全を与えるものは、この原理の強まりに有利に働く。この点で、法と秩序が広く行き渡っていること、そして平和と安寧が続く見通しは、かなりの影響をもつ。安全が十分であるほど、蓄積への欲求は現実の力として強まる。財産が守られにくい地域や、資産を損なう変動がより頻繁で深刻な地域では、そもそも貯蓄する人が少なくなり、貯蓄する人であっても、多くは現在の享楽の誘惑より不確かな将来を選ぶために、より高い資本利潤率、すなわち資本の利益や利得がより高いという誘因を求めがちになる。

これらは、目先の利益を犠牲にして将来の利益を顧みることが、理性の目から見てもそれほど得策かに影響する考慮事項である。しかし、その犠牲を払う気になるかどうかは、

その得策さだけに左右されるわけではない。貯蓄しようとする性向は、多くの場合、理性が指し示す程度に遠く及ばないが、ときにはそれを超えて過剰になりがちでもある。

蓄えようとする気持ち弱まる背景には、将来を顧みないことと、他人への関心が薄いことがある。将来を顧みないことは道徳心だけの問題ではなく知的な力とも関係しており、知的水準がきわめて低い人や共同体では先の見通しを持ちにくい。目の前にない事柄、とくに将来の事柄が想像力や意志に強く働きかけるには、ある程度の知的発達が必要だと考えられる。また、他人への関心が弱まるほど蓄えが減るのは、現在の貯蓄の多くが自分の利益よりもむしろ他者の利益を目的としているためであり、子どもの教育や将来の自立、親族や知人の将来の利益、金銭や時間を投じて公的または私的に有用な目的を進めることなどがこれに当たる。もし人々がローマ帝国末期の一部で見られたように、相続人にも友人にも社会にも、さらには自分の死後にも残るいかなる目的にも関心を持たない状態へと広く傾けば、老後に必要な分を超えて楽しみを抑えてまで貯蓄する例は少なくなり、その場合、資産は終身年金など、本人の生存とともに資産の存在も終わる形で保有されることになる。

知的・道徳的なさまざまな要因が重なり合う結果、人類の各地域や各集団には、蓄積をしようとして実際に行動する欲求の強さに、一般に言われる以上の大きな幅があるとされる。そして文明の発達が遅れているのは、目立ちやすいほかの欠乏よりも、こうした欲求の弱さが主な原因になっている場合が少なくない。狩猟社会を例にすると、「この状態では、将来に確実に予見できることも、自分で左右できることもほとんどないため、人は必然的に無計画で、将来を顧みなくなる。さらに、現在の能力を手段として将来の必要に備えようとする動機が欠けているだけでなく、離れた時点同士や、それらを結び付ける一連の出来事を、心の中で絶えず結び付けてとらえ、それに基づいて行動する習慣も欠けている。したがって、たとえその結び付きを生み出すのに必要な努力を引き出す動機が呼び覚まされたとしても、それを確立できるように考え行動するよう心を訓練するという課題が残る」と説明されている。

セントローレンス川の岸には小さな先住民の集落がいくつも点在し、周囲には昔に木が伐り払われたような開けた土地と、その外側に広い森林が広がっている。しかし、そ

の開墾地が耕されることはほとんどなく、耕作のために森をさらに切り開こうとする動きも見られない。土は肥えており、たとえそうでなくても家の近くには堆肥や肥やしが積まれているので、各戸が半エーカーほどを囲って耕し、ジャガイモとトウモロコシを植えれば、年の半分を支えるだけの収穫は得られるはずなのに、ときには深刻な欠乏に陥り、折々の節度のない飲酒も重なって人口は減り続けている。この無関心は、労働そのものを嫌うことや怠け癖だけでは説明しにくい。というのも、報いがすぐ得られる場合には熱心に働き、狩猟や漁労に加えて川の舟運にも多く従事し、大型船でオールをこいだり竿で押したりし、急流をいかで通すときに必要な臨時の人手の大半も担っているからである。障害が農作業への嫌悪だけにあるのではない。農業への偏見があるのは確かだが、偏見だけでは行動を決定づける原理にはなりにくい。実際、見返りが早く大きい場所では耕作が行われ、セントフランシス湖の小島のうちセントレジス集落に近い島々ではトウモロコシがよく育ち、収穫が一〇〇倍に達することもあり、半熟でも腹持ちのよい食事になるため、毎年よい土地の一部がそのために耕されている。島では家畜が入り込めず、柵も必要ないが、もし柵という追加の出費が必要なら、集落に隣接する共有地と同じように放置されるだろう。共有地は一時は作付けされていたようだが、い

までは近隣入植者の家畜が、柵で守られていない作物を食い荒らしてしまう。そのため、それを防ぐ追加の出費が耕作を妨げ、結果として耕作は、この小社会の蓄積への意欲に見合う段階よりも、見返りの遅い手段へと押しやられている。

注目すべきは、彼らがこの種の道具を作るとき、途中で手を止めずに最後までやりとげ、仕上げが行き届いている点である。小さなトウモロコシ畑は雑草がきれいに取り除かれ、鍬でよく手入れされており、少しでも手を抜けば収穫が大きく落ちることを経験でよく知っているため、そのとおりに行動している。耕地を広げられないのは必要な労働が障害だからではなく、その労働に対する見返りが遠いからであり、遠方の部族の中には、こうした労力が白人よりはるかに多いところもあると聞く。同じ土地を休ませずに作付けを続け、肥料も使わないかぎり、鍬と手で土を最も注意深く掘り返して細かく碎かなければ、収穫はほとんど望めない。このような状況であれば、白人は新しい土地を開墾し、初年に採算が取れなくても報いを翌年以後に期待するだろうが、インディアンにとっては翌年以後の報いは遠く、十分な動機になりにくい反面、数か月のうちに労働で得られるものを手に入れるためには、白人以上に熱心に働く。

この見方は、イエズス会がパラグアイの先住民を文明化しようとした興味深い試みに

よって裏づけられる。宣教師たちは、当時「未開」「野蛮」と見なされた人びとの信頼を驚くほど深く得て、生活のしかたを全面的に改めさせるほどの影響力を持ち、絶対的な服従と従順さを引き出して争いを抑え、平和を保った。農業では欧州式の手順のすべてを教えただけでなく、より難しい技術や技能も多く伝え、シャルルヴォワは各地で「金箔師、画家、彫刻家、金細工師、時計職人、大工、建具師、染色職人」などの工房が見られたと記している。ただし、これらの仕事は職人の個人的な利益のためではなく、生産物は宣教師が自由に処分できたので、宣教師は人びとを「自発的な専制」のもとで統治したことになる。その結果、労働を嫌うことから生じる支障は徹底して抑えられた一方で、より大きな問題として、先を見通して備える力の乏しさが残り、彼らを指導する宣教師には絶え間ない細かな監督が欠かせなかった。たとえば、耕作に使う牛の世話を任せても、夕方になっても牛を農具につないだままにしておいたり、さらにひどい例では夕食のために牛を屠ってしまったりしたことがあり、注意されると、空腹だったのだからそれで十分に弁解になると思っていたという。ウリョアは、神父が各家を回って本当に必要なものを点検しなければ、先住民は何ひとつ自分で気にかけないのだと述べ、家畜を屠る場にも立ち会って肉を公平に分け、無駄が出ないようにすべきだとしている。

それでもシャルルヴォワによれば、どれほど手を尽くして生活必需品の不足を防ぐとしても宣教師が困らされることがあり、種に回す穀物すら十分に確保しないことがしばしばあったという。ほかの蓄えもきちんと見ていなければ、たちまち暮らしの手だてを失うのである。

貯蓄という形で実際に表れる蓄積欲求の強さを考えるうえで、中国は、ここで述べた状況と現代の欧州との中間に位置する例として注目に値する。生活習慣や社会的条件のさまざまな事情から、中国の人びとは他のアジア諸国の人びとよりは慎重で自制的だが、欧州の多くの国民ほどではないだろうと予想される。以下では、その事実を示す証拠を挙げる。

耐久性は、資本を蓄えようとする実効的な意欲の強さを示す主要な資質の一つとされ、旅行者の証言や報告によれば、中国で作られる道具や工具はヨーロッパの同種のものに比べてかなり壊れやすいという。住居も上層を除けば、日干しレンガや土、または木や竹の骨組みに土を塗った簡素な造りが一般的で、屋根は葦を小舞に結び留めただけとされ、これ以上に頼りない仮設同然の建物は想像しにくい。間仕切りは紙で、毎年張り替えが必要だとも伝えられる。農具やその他の道具類もほぼ木製で、金属の使用がごくわ

ずかにとどまるためすぐに摩耗し、買い替えや更新が頻繁になる。蓄積への意欲がより強ければ、当面の支出が増えても長持ちする材料が選ばれるはずだが、同じ傾向は土地利用にも表れ、他国なら耕作される土地の多くが荒れ地のまま残っているとされる。旅行者はいずれも、湿地が大半を占める広大な土地が自然のまま放置されていると記しており、湿地を耕地に変えるには、一般に数年をかけてまず排水し、地表を長く日光にさらし、そのうえで多くの作業を重ねて、ようやく作物が育つ状態にしなければならない。労働に見合う収益が見込めるとしても、その回収はずっと先になり、この種の開墾には、中国で一般に見られる水準を上回る強い蓄積への意欲が前提になる。

収獲物は、前にも述べたとおり、将来の不足に備えるための蓄えであり、その管理や配分は、同じ目的を果たすほかの手段と同じ原理に従う。現地では主食は主に米で、収穫は六月と一〇月の年二回であるため、一〇月から翌六月までの八か月は毎年、備蓄するのに必要がある。今日と八か月後のこの日とをどう見積もるかは、将来の欠乏を避けるために今どれだけ自制して節制するかに表れるが、その程度は小さいようだ。実際、イエズス会士のパレニン神父は、最も聡明な人物の一人で、中国のあらゆる階層の人々の間で長年暮らしたが、物不足や飢饉がたびたび起きるのは、この点における先見と儉

約の大きな欠如が原因だと述べている。

中国で生産が頭打ちになる主な理由は、勤勉さの不足ではなく、天候や土地といった自然条件がもたらす制約にあり、その点は半ば農耕化したインドの例よりもはっきりしている。収穫までが早く、作った道具がほどこなく目的を果たす環境では、土地の性質と住民の需要に合った技術や知識が大きく進み、産業は活力と実効性を帯びやすい。温暖な気候、自然の肥沃さ、積み重ねられた農業技術に加え、各地の土壤に最も有用な作物を見いだしては順に適応させてきた工夫によって、中国の農民は地表のほぼどこからでも、耕作や作付けに投じた労働をはるかに上回るとみなされる収穫を短期間で得ており、収穫はふつう二回、時に三回にもなる。とりわけ米のような多収の穀物では、いったん開墾できる土壤なら技術しだいではほとんどどこでも十分な収穫が見込めるため、労働を投じればすぐ耕地にできる場所で、収穫が得られない土地はない。丘はもちろん山にも段々畑を築き、この国で最大の生産要因とされる水を水路で各所に導き、または古くから使われてきた簡素で巧みな揚水機でくみ上げるが、こうしたことが容易なのは、そのような場所でも土が深く、植物質の土が厚く覆っているからである。さらに、道具がほどこなく目的を果たす場面では、労働が扱いにくい材料からでも道具を作り出すほうへ向

かう。その例として、湖や川にはペルーの浮き畑に似た、いかだ状の構造物に植物質の土を載せて耕作するものがしばしば見られ、この方法では材料に働きかければ短期間で成果が得られる。温和な日差しに豊かな土壌と十分な水分が加われれば植生はこの上なく繁茂する。だが、収穫が多くても得られるまでに時間がかかる場合は事情が異なる。欧州の旅行者は、排水するだけで耕作できる湿地のそばに、数年で朽ちる浮き畑が並ぶのを見て驚き、実りが長く続く堅固な地面に労働を向けない理由を不思議がるが、現地の人びとは将来の年数よりも目の前の時間を重く見ており、蓄積への欲求の強さは欧州人とは大きく異なる。遠い未来まで見通そうとする欧州人は、備えの不足と先を読む配慮の欠如が中国の人びとを絶え間ない労苦と、彼らが耐えがたいと考えるほどの悲惨に結びつけているとして驚く一方で、中国の人びとの視野はより狭く、その日その日を生きることに満足し、労苦の多い生活でさえ恵みとして受け止めるようになっている。

ある国が、当時の知識水準で可能なかぎり生産を進めた結果、その国における有効な蓄積欲求の平均的な強さに見合う収益、または利潤しか得られなくなると、いわゆる「停滞状態」に達する。これは、生産技術や生産方法が改善されるか、蓄積欲求の強さがいつそう増さないかぎり、国全体としてこれ以上資本が増えなくなる状態を指す。停

滯状態では、国全体の資本は増えないものの、個人のあいだでは富の増減が起こり、豊かになる人と貧しくなる人に分かれる。先を見通して備える力が通常の標準より低い人は困窮して資本を失い、その結果、平均を上回る有効な蓄積欲求を持つ人の貯蓄が入り込む余地が生まれる。そうした人々が、慎重さに欠ける同国人が所有していた土地や工場、製造所などの生産手段の自然な買い手となり、それらを買収する、または引き受ける担い手となる。

資本の利回りが国によって高低を示す理由や、場合によっては利回りを下げないかぎり追加の資本が投資先を見つけられなくなる理由については、のちに明らかになるだろう。仮に中国が一般に言われるとおり定常状態に達しているのだとすれば、利回りが高水準であるにもかかわらず資本の蓄積が止まっていることになる。法定金利は一二%で、実勢は一八%から三六%の間で動くとされる。したがって、この高い利回りでは、国内にすでにある以上の資本は使い道を見いだせず、またこれより利回りが低ければ、中国人にとって現在の享樂を控えて将来に回すだけの十分な誘惑にならないのだろう。これに対してオランダでは最盛期、政府がふだん二%で借入れ、民間も十分な担保があれば三%で資金を調達できた。中国は、ビルマやインドの藩王国のように、国家や民間の

借り手の不誠実さや貧困にともなう危険を埋め合わせるために高金利が不可欠な国ではない。それでも高い利回りのもとで資本の増加が止まっているのが事実だとすれば、ヨーロッパの多くの国よりも蓄積への意欲が弱く、将来を現在ほど重く見ない傾向があることを示している。

四

これまで私たちは、一定の安全が確保されている状況にあっても、蓄えたいという欲求の平均的な強さが、理性と冷静な計算が妥当と認める水準に届かない国々を見てきた。次に、その水準を明確に上回る国々を取り上げる。繁栄したヨーロッパの国々にも浪費家は多く、国によっては、なかでもイギリスでは、手仕事で生計を立てる人々の節約や将来への備えの度合いは高いとは言えない。それでも、共同体の大きな部分を占める専門職、製造業、商業の階層は、一般に、ほかのどの階層よりも貯蓄する手段と動機を備えているため、蓄積の気風は非常に強い。各地で富が急速に増えている兆しが見られるのも、その表れである。投資先を求める資本の総量の大きさは、鉄道建設や海外での投

機的事業のように、特別な事情によってその多くが一つの方向に集中し、総額の大きさが目に見える形で表れるとき、しばしば人々を驚かせる。

英国で資本を積み上げようとする傾向が強いのは、いくつもの条件が重なっているからだ。英国は国土が長く戦禍による荒廃を免れ、他国よりもはるかに早い段階から財産が軍事的暴力や恣意的な略奪から守られてきたことで、資金を他人に託しても安全だという信頼が、長年にわたり家庭に根づいた。地理的条件も関係し、英国の力と重要性の源が戦争より産業に置かれ、進取の気性に富む人々の多くが製造業や商業へ向かったため、他人の蓄えを奪うよりも、生産して蓄えることで必要を満たし、野心をかなえる道が選ばれやすくなった。政治制度が比較的整っていたことも大きく、個人の自由が活動力と自立心を育て、結社や協力の自由が大規模な事業を進めやすくした。さらに、同じ制度が別の面では富を求める欲望に強い刺激も与えた。封建制の早い衰退によって、もともと商業に従事する層とそれを見下してきた側との身分差が薄れ、富が政治的影響力の実質的な源になる体制が育つと、富は本来の実用性とは別の作爲的な価値も帯びるようになった。富は権力と同義になり、権力が大衆にとって評価の基準である以上、富は個人の評価の最大の源となり、人生の成功を測る尺度にもなった。社会のある階層から

その一つ上の階層へ上がることが英国の中産階級の大きな目標であり、蓄財がその手段となった。そして、勤労によらずに富裕であることは、勤労によって富裕であることより一段高い地位とみなされてきたため、現役時代に高収入を得るだけでなく、引退して実現した利得で豊かに暮らせるだけの額を蓄えることが、野心の対象になった。こうした動きは、ピューリタン主義の影響が及んだ国々にみられる個人的な享楽を味わう力の乏しさに大いに支えられた一方で、蓄積は別の理由で難しくもなった。富と威信の結びつきがあまりに強いため、多額の支出をしているように見せたい愚かな欲望が、広い階層で情熱のような力を持ったのである。しかも、支出から得る喜びが世界でもおそらく最も乏しいとされる国民の間でさえ、この事情のために見栄のための支出が力を持ち、英国の蓄積意欲はオランダほどには高まらなかった。オランダでは、無為に暮らす富裕層が無謀な浪費の手本を示さず、実質的な力を持つ商人階級が生活水準と適切さの基準を自ら定める立場にあったため、質素で誇示を避ける習慣が保たれた。

したがって、イングランドとオランダでは以前からそうであり、いまではヨーロッパの大半の国でも（同じ競争のもとでイングランドに急速に追隨しながら）、蓄積への欲求は、アジアで必要とされるような潤沢な収益がなくても十分に働いている。利潤率が

きわめて低くてもその欲求は衰えず、蓄積は鈍るどころか、むしろ以前にも増して速い勢いで進んでいるように見える。生産増加の第二の要件である資本の増加についても、不足に向かう兆しは見当たらない。この要素にかぎっていえば、生産は限界を定めがたいほど拡大しうる。

資本への収益が現在よりさらに低下すれば、資本蓄積の進行が大きく鈍るのは確実である。だが、資本が増える可能性があるだけで、なぜそのような影響が生じるのかという疑問が残る。この問いは、生産に必要な三要素のうち、残る一要素へと注意を向けさせる。労働と資本という他の二要素の増加には必然的な上限がないのだから、生産の制約は、もともとそれ自体の量に限りがある唯一の要素の性質にかかっている。それは土地にほかならない。